第44回競技設計 「新潟建築賞」コンペ一次審査会結果

応募総数 43 点

受付番号	氏名	所属	タイトル	一次審査結果
1	大倉　弓吾	新潟工科専門学校　2年	交差する図書館	
2	太田　悠斗	新潟工科専門学校　2年	まつりかい	
3	小見　俊太	新潟工科専門学校　2年	村上のととのゐ	
4	熊谷　柾	新潟工科専門学校　2年	ここから始まる村上観光	
5	土田　珠未	新潟工科専門学校　2年	お寺×人×時間	
6	星　祐紀	新潟工科専門学校　2年	ファッションでつくる村上	
7	柳澤　凜音	新潟工科専門学校　2年	馬屋巡り	佳作
8	山﨑　大輝	新潟工科専門学校　2年	エネルギーと村上の伝統工芸品	
9	吉井　大翔	新潟工科専門学校　2年	村上の旅の休憩場	
10	若山　和真	新潟工科専門学校　2年	村上に新しいお酒を	
11	近藤　舞佳 長谷川　璃乃	新潟工科専門学校　1年	交流の三育～社会問題から食育、教育、遊育を学ぶ～	
12	加藤　佑翔	新潟工科専門学校　1年	身も心も温まる足湯カフェ	
13	降幡　凜	新潟工科専門学校　1年	The connection between people and dogs～美しき村上市での犬との関わり方～	
14	内藤　雄一	新潟工科専門学校　2年	Chateauムラカミ	
15	深井　美咲	新潟工科専門学校　2年	明日を結わえる	
16	池亀　心菜 安部　温音	新潟工科専門学校　2年	誓いと終の祈り-舟が行き交う奥三面ダムと斎場・火葬場の提案-	優良賞
17	五十嵐　大弥 五十嵐　瑠偉	新潟工科専門学校　2年	千尾を仰ぐ-ウライを渡り見上げる、塩引き鮭と伝統漁体験-	
18	池田　粋 長谷川　大和	新潟工科専門学校　2年	余白を集いの在処へ-地階をこの街のサードプレイス-	
19	齋藤　駿 石川　裕也	新潟工科専門学校　2年	偏地開花-村上市の町家に緑の絵の具を-	
20	猪俣　隆仁 江部　治真	新潟工科専門学校　2年	山水を求めて-二子島に佇む憩いの場で自然を楽しむ複合施設-	
21	海藤　隼介 田部　琉星	新潟工科専門学校　2年	まわり　めぐり　つながる-新村上総合病院に隣接する世代共有の提案-	
22	白倉　陸 鏡　斗弥	新潟工科専門学校　2年	もてなしと継承-旧村上総合病院とショッピングセンターの跡地に代替案となる新たな拠り所を-	
23	小山　龍人 熊倉　瑠輝矢	新潟工科専門学校　2年	さんかく屋根のみんなの家-米坂線跡の再利用計画-	優良賞
24	小柴　丞一朗 塩原　凛久	新潟工科専門学校　2年	櫓、紡ぐ風景。櫓から村上市を見下ろす展望図書館	
25	野本　悠太 小林　美優	新潟工科専門学校　2年	間を紡ぐ-村上かけ渡す1200メートルの歩廊-	入賞
26	平田　樹 佐藤　紘透	新潟工科専門学校　2年	なぞえと茶の湯-羽下ヶ渕の茶畑で交流する伝統と継承-	
27	澁木　春人 鹿間　寿弥	新潟工科専門学校　2年	渡りから佇みへ-廃隧道が奏でる、音楽ホールと潮風の建築提案-	入賞
28	高橋　海里	新潟工科専門学校　2年	みちくさの川遊び-勝木川とさんぽく小学校をつなぐ-	

受付番号	氏名	所属	タイトル	一次審査結果
29	鈴木　爽平	新潟工科専門学校　2年	まちやほいくえん−村上駅周辺を活気溢れる街にする保育園−	
30	武田　知樹	新潟工科専門学校　2年	会偶の舟−岩船港の古本のある待合所−	
31	山浦　美咲 森谷　望杏	新潟工科専門学校　2年	縁と慣の通い土間−巡る村上町家の新プロジェクト−	大賞
32	内許　博翔 小野　翼 成田　陽登	新潟大学　3年	居場所の未来地図、人情と交流の交響曲	
33	野崎　貴允	新潟工科大学　3年	まちを滑走（スケボー）する−余白スケートパーク計画ー	
34	貝川　隆史	KAIデザイン	村上の交流館　町屋のPocket Park	
35	川﨑　一真	東京工業大学　修士1年	協働によって守られるまち−地域内外のアクターの連携によって作られる新しい共同体と継承される街−	
36	高畑　裕信	ヒロ　タカハタ　デザインスタディオ	ウインターヒルのある家	
37	小出　楓河 長谷川　晴人	上越総合技術高等学校　3年	交流できる雁木	
38	松木　太一	上越総合技術高等学校　3年	酒と鮭	
39	阿達　翔也	新潟工科大学大学院　修士1年	茶畑にかえる−北限の地で新たな伝統をつくる−	
40	木村　壮翔	新潟工科大学　3年	海を歩く〜波と岩に触れ合う遊歩道〜	
41	松井　瑠名 矢代　一真	新潟工科大学　3年	屋根の上をめぐる〜町屋通りに新しい風景を〜	
42	道前　真衣	新潟工科大学　3年	余白（シロ）のなかへ	
43	老　来歩	新潟工科大学　3年	回帰−鮭を楽しむ新サーモンハウス−	

2024/03/05

令和 5 年度新潟建築賞設計コンペ 講評

審査員長 手塚貴晴+手塚由比

再び村上に舞い戻った。何か印象が以前と違う。多分歴史保存地区という劇の書き割りを抜けて、裏側にある大道具部屋をのぞいてしまったからであろう。前回の滞在には小池さんというガイドがついていた。ガイドさんというのは良くも悪くも何処を見せれば客が喜ぶのかわかっている。だから大道具部屋など見せない。特に小池さんの場合は街並み再生の設計のご本人であるから、尚更その機微を知り尽くしている。今回は嘉門亭のご当主にご案内され、さらに自分でも勝手に足を伸ばした。すると脚本に出てこない苦労話が垣間見えてくる。村上の歴史保存地区は狭い。一歩保存地区から出ると、道路は自動車優先の考えに基づいていて広い。さもありなん。現実は厳しい。その現実の中で心ある人々が守り育てて続けているのがこの場である。学生の提出案はその大人世界の矛盾をよく表していた。彼らはこういった歴史地区に住んだこともそれどころか触ったこともない異邦人なのだ。多分押入れや床の間さえ日常には存在していない。まして嘉門亭で高価な茶の儀式を愉しむことなど理解不能なオヤジとオバさんの嗜みにしか見えないのかもしれない。結局町屋の成り立ちを理解した案は一つも存在していなかった。

「縁と慣の通い土間−巡る村上町屋の新プロジェクト−」について褒めたいのは、説明の大半を占めた通い土間の部分ではない。ミラー仕上げの新築部分である。奈辺の街並みを写して歴史地区が二倍になる。そしてそれがハーフミラーで夜に中身の木組みが透けて見えてくれば百点満点である。しかしご本人たちはその良さを全然わかっていない。良いのである。あと 30 年もして老眼鏡をかけるようになればわかるようになるから。建築とはそういうものである。通い土間の部分も悪くはない。しかし真っ直ぐ道が通るわけもないし、真っ直ぐでは面白くない。多種多様な矛盾が凸凹しながら展開するところに脚本の面白みがあるのである。やっぱりわかっていない。だけど良いのである。いつかわかる日が来る。その時まで小池さんが頑張って街並みを守ってあげるから。よって審査員一同満票にて最優秀に選ばせて頂いた。

「さんかく屋根のみんなの家−米坂線跡の再利用計画−」の設計者はタイにあるメークロン市場を知っているのかと思ったら全く知らないという。審査員を長年請け負っていると、時折建物の中に電車を引き込むコンペ案を見かける。実のところ日本に実物の事例は見当たらない。多分メークロンを実際に見た建築家が輸入して、日本国内でメタモルフォーゼを遂げたものであると推察する。しかし良いのである。カレーにせよラーメンにせよ「和」に取り込まれて醸成され新たな文化に育っている。しかし実際にメークロンに行った人間に言わせると、この案は内部を普通の部屋に分けすぎである。特に「多目的室」という表記が良くない。会議室のテーブルに「テーブル」と書くほどに無意味である。しかし良いのである。屋根に人々を登らせたりして環境に配慮しているから。新潟に住んでいるのに雪の経験はないのだろうか？融雪装置はそこまで普及しているのか？温暖化の影響か？厳しい環境は設計者にとって強いカードである。いずれわかるようになって欲しい。

「誓いと終の祈り−舟が行き交う奥三面ダムと斎場･火葬場の提案−」は世の大多数の学生に違わずアイデアがてんこ盛りである。皿数が多い。皿数が多すぎると客は何を食べているのかわからなくなる。結果としてグーグルマップの星を減らすことになりかねない。だけど良いのである。アイデアは綺麗であるから。水面の下に隠された集落があると思うと、「カリオストロの城」の最終シーンのようにいつの日か宝物が現れ出でる気がしてワクワクさせられる。

「間を紡ぐ−村上にかけ渡す 1200 メートルの歩廊−」は騙すのが上手い。実は一次審査で最初に目についた案である。歴史事象を読み込み、三点を繋いだ手法は心憎い。しかし審査員はそう簡単に騙されない。こんなものは日本海の荒波で竣工を待たずして流されてしまう。しかし良いのである。この案はリサイクルして琵琶湖や瀬戸内海のような波のないところで試すか、四万十川の沈下橋のように、どうやっても流されないタフな構造に変えると良い。私もコンペ案は随分リサイクルした。リサイクルは SDGs の基本である。

「渡りから佇みへ−廃隧道が奏でる、音楽ホールと潮風の建築提案−」の提案者はもっと音楽を聴きに行くべきである。音楽をテーマにするのであれば、プレゼン前にライブに通うなり人に聞くなりして、付け焼き刃をするべきである。付け焼き刃はややもすると馬脚を見せるが、「音楽はあまり知りません」といってしまうと、最初から馬脚が丸見えではないか。もっと賢く立ち回ってもらいたい。建築家という職能の基本である。しかし良いのである。隧道という歴史遺産に気が付き、音が響くらしいということを活用したのであるから。だからこそ、その本質を自分で理解してもらいたい。

実のところ審査員を務めた大人一同もよくわかっていないのだ。だから学び続ける。知ったかぶりをする。だけど良いのだ。そこが建築の面白いところだから。